
漢族の現代中国環境論の課題と展望

榎根 勇

<愛知大学>

要 旨

現在中国の沿海部では、近代化に伴って深刻な環境問題が発生しており、一方内陸部は、西部大開発に伴って発生するかもしれない環境問題の未然防止という難問を抱えている。また、化石燃料の大量消費国である中国は、自然災害拡大の原因となる地球温暖化防止対策を同時に実行する責務も負っている。これらの複雑に絡み合った環境問題に対処するには、対症療法的な対処だけでは不十分であり、「新しい知」に基づいた「次なる社会システム」の構築が必要である。その「新しい知」の1つのモデルとして、雲南省の麗江古城を選び、水をつなぎ手として「次なる社会システム」をいかにして構築すべきかについて考察する。

キーワード 新しい知、次なる社会システム、環境哲学、現代中国環境論、麗江古城

I、上海駅前広場にて

2006年4月15日、朝、晴れ上がった上海駅前広場の一角では、地方から出稼ぎにきた数人の男たちが、大きな荷物の包みを台にしてトランプ遊びに興じていた。駅の正面に見える「上海站 SHANGHAI RAILWAY STATION」という大きな看板の下に「樹立社会主義榮辱觀 培養和諧社会新風尚」の赤い横幕が、また駅東南出口の上には「依法誠信納稅 共建小康社会」の赤い横幕が掲げている。目を転じると、駅の向かい側の少し古くなった20階建ての上海広場長城假日酒店の屋上には「創建和諧社会」の文字が、その右隣にある上海郵電大廈の10階付近の横壁には「努力構建和諧社会 共同建設平安上海」、また地下鉄停車庫入口には「構築和諧社会 創建平安城市」の看板がある。^(注1)

中国は第11次5カ年計画の初年に当たる2006年に、環境問題の克服を目指して、持続可能な発展・和谐社会・小康社会・循環経済の4つのキーワードを掲げて、大々的なキャンペーンを開始した。その具体的な様子を示す一例が、上海駅前広場に大きく踊っていた上の文字群である。それらは、「社会主義の価値観を樹立し、協調と調和の社会に向けた新しい気風を養い、法に則って税金を納め、ほどほどの生活で満足し、共に平安な上海市を建設しよう」と呼びかけている。中央からの指示に応えた上海市当局のこのような呼びかけに異を唱える人は、多分いないであろう。

しかし、環境問題発生の原因は経済活動であり、経済がグローバル規模にまで拡大してきた基礎には科学技術の進歩がある。科学は知りたいという欲望、技術は新しいものを造りたいという欲望、経済はより儲けたいという欲望を、それぞれ基本的な駆動力にして発展してきた。そして人間は、よりよい暮らしを求めて欲望を膨らませつづけてきた。環境問題の裏面

には人間の欲望がある。したがって環境問題は、研究者が研究論文を書けば終わりという科学だけの問題ではないし、指導者がスローガンを掲げれば済むという宣伝の問題でもない。問題の真の所在は、上海駅前広場で踊っていた文字群の意図するところを現実のものとするために、どのような政策を立案し、それをどのような手順で実行し、どのような社会システムをつくり上げることが出来るかにある。環境問題には、科学、技術、経済、政治、社会、文化のすべてが関係している。高見邦雄（2003）は「すべての中国論の根底に環境問題がすえられる必要があります」（注²）と述べているが、それは彼が、このような環境問題のもつ複雑性と全（学問）領域性を、山西省大同での12年間にわたる植林ボランティア活動を通じて痛感したからであろう。

環境研究会の主旨である私は、研究会発足時に、環境問題を「自然と人間の関係は如何にあるべきかを考える問題」と定義し、環境研究会の目標を「環境改善技術の体系化」と定めて、先ずそのための方法論について『中国とアジア世界の環境問題に関する方法論的考察』（第1論文）で論じた。その目的は、近代化への道を遅れて歩き出した中国とアジア世界が、先進工業国が経験したような環境問題の発生を見ることなく「次なる社会システム」の構築へと発展していくためには、どのような方法がありうるかを探ることにあつた。

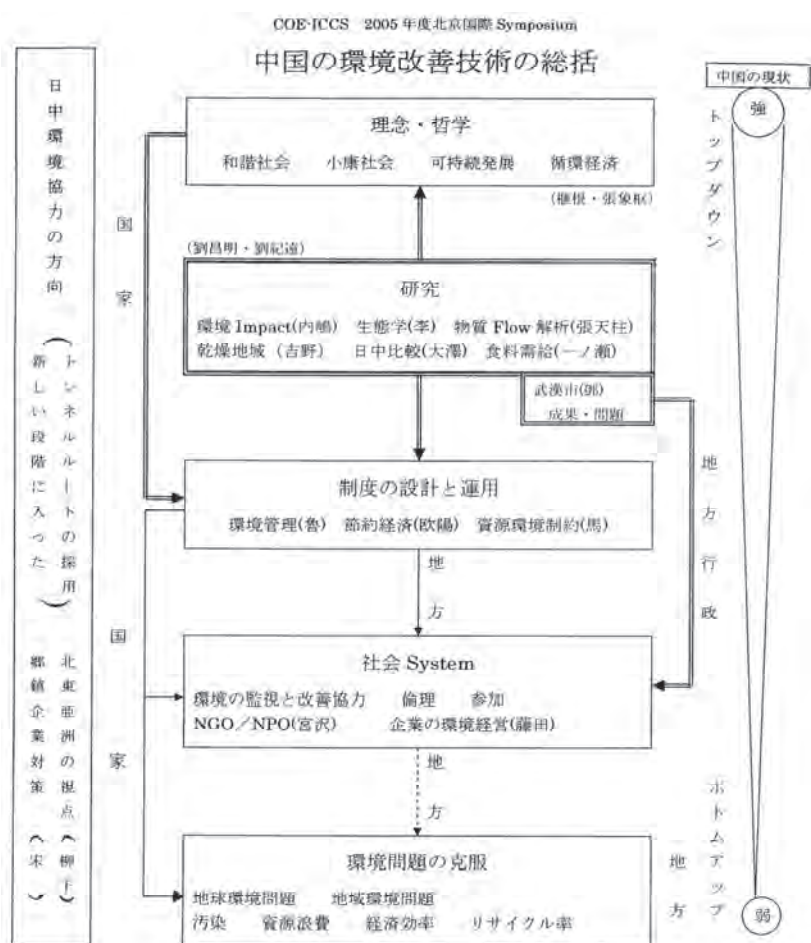


図1 COE-ICCS 2005年度北京国際シンポジウムの総括

図1は2005年度のCOE-ICCS北京国際シンポジウムの総括セッションにおいて、私がこのシンポジウムの環境セッションで発表された18篇の論文の総括報告を行ったとき〔愛知大学国際中国学研究センターほか 2005〕、まとめとして会場の聴衆に配布した図である。この図に示した枠組みは、環境改善技術体系化の具体的な一例である。次に、『環境改善技術体系化の基礎』（第2論文）で、体系化に必要な「新しい知」について暫定的なまとめを行った。それは、「二元論に対抗する、風土論的 - 関係論的 - 全体論的 - 非二元論的な知」と要約される。そして、『現代中国環境論への招待』（第3論文）を書き、環境研究会メンバー全員に現代中国環境論（本書）の共同執筆への参加を呼びかけた。それ以後、私は独自の活動を開始し、『自然と人間の統合——文理融合への1つの試み——』（第4論文）と『麗江古城の環境論』（第5論文）、『環境問題に必要な倫理』（第6論文）を書いた。これらの6論文と、それ以外の2論文を、まとめて一冊の本としたものが、別に印刷した『現代中国環境基礎論』（樞根 2006）である。本稿はそれらの内容の要点を再整理したものである。

II、「新しい知」のための哲学

イマニュエル・ウオーラーステイン(2001)は、環境問題には「出口なし」と断じて、「新しい知」の必要性を説いた。養老孟司(2005)は「環境問題を片づけたければ、21世紀の科学は、従来とはまったく異なる考え方や前提に立たざるを得ない」と述べた。両氏の考えを私なりに敷衍すれば、デカルト的二元論に基礎をおいた古典物理科学は「自然の価値」を無視しており、アイザック・ニュートンの天体力学に範をとったアダム・スミスの近代経済学も同様に「自然の価値」を無視しているので、「自然の価値」を取り入れた「新しい知」や「新しい科学」の創出が必要になった、となる。

いま近代という時代が終焉を迎えつつある。デカルト的二元論に基づく「近代」の寿命は3世紀ほどだった。現間氷期1万年の中の3世紀は、長かったともいえるし、短かったともいえる。過去80万年に起きた氷期—間氷期のリズムから推測すると、すでに現間氷期は終わりに近づき、地球の気候は「次の氷期」へと寒冷化する過程にあった。その方向を地球温暖化が逆転させた。地球温暖化が寒冷化を「防いだ」という見方もできる。地球温暖化を絶対悪と決め付けることのできない理由である。しかし西澤潤一(2000)は、今の化石燃料を使用した経済構造のもとでは、このまま温暖化が加速されて、正のフィードバックが作用し始めれば、遠くない将来、大気中のCO₂濃度は人類が窒息死する3%に達するだろう、と警告している。地球温暖化は、海面上昇や降水量変動など多くの面で、人類に「温暖化した地球」への適応を迫っているが、窒息死に対してだけは「適応」はあり得ない。

ニュートンによって築かれた機械論的・決定論的世界観は、すでに20世紀前半に、量子力学によって否定されていた。ウェルナー・ハイゼンベルクの不確定性原理によると、一個の基本粒子の位置と運動を同時に計測することはできない。量子論に基礎をおく世界観は、絶対的偶然・確率的法則・非決定論である。しかし、デカルト的二元論に対抗できる哲学は現れなかった。20世紀末から21世紀初頭にかけて、ようやく、脳科学・認知科学・ロボット工学・分子生物学・生命科学などの成果によって、身体と精神、そして環境と人間は、相互に作用し合っており、分離することのできない存在であることが明らかになった。これに呼応するかのよ

うに登場したのが、「新しい知」のモデルとなり得る、ケン・ウィルバー(2002)の「万物の理論」とアービン・ラズロ(2005)の「包括的な万物の理論」である。また日本人では、清水(2003)と中田(2001, 2002, 2006)が、独自の非二元論の哲学を公にしている。

ケン・ウィルバーの「万物の理論」は、この本の帯にあるように、「物質・生命・心を含む宇宙と人間のホラーキー構造を、あらゆる思想・哲学・宗教を含んで統合的に明らかにし、我々のいる位置と進むべき未来を鮮やかに指し示した」という点で、私たちが環境研究会で探し求めてきた「新しい知」の1つのモデルを提供する。彼は、万物を取り込む統合的なビジョンの構築に当たって、「それ・それら・私・私たち」という4つの象限を提示する。図2は、ウィルバーの考えを基礎にして、私の考えも少し入れて整理した四象限の構図である。

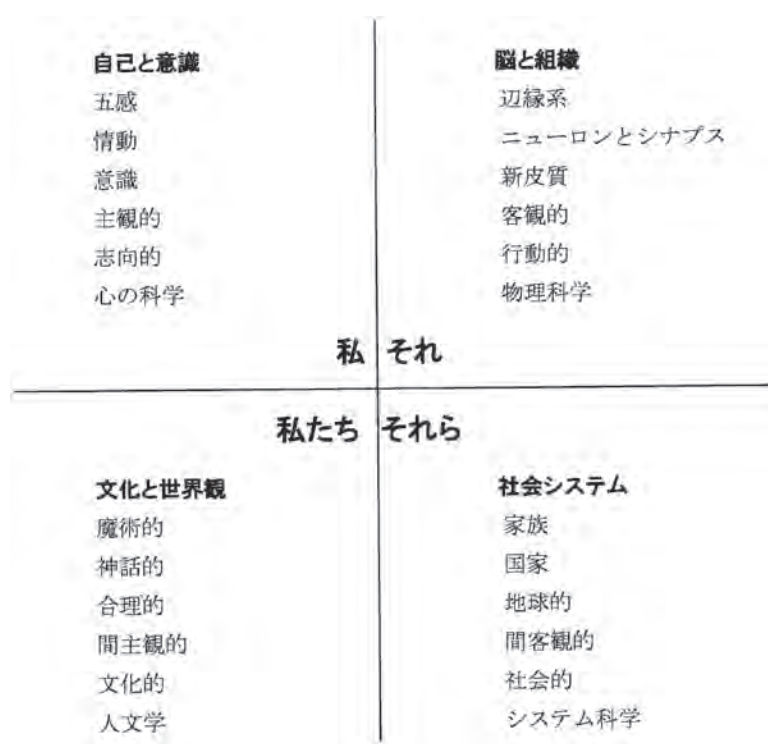


図2 「万物の理論」の四象限の構図

この図の右象限の2つは外面にあるものを、左象限の2つは内面にあるものを、また上の2つの象限は個(人)的なものを、下の2つの象限は集団的なものをそれぞれ示しており、万物はこの四象限の中に織り込まれている。さらに各象限にはラセン・ダイナミックスの展開の波のような(cowan@spiralphysics.com) 垂直方向へ登る「発達のレベル」の存在が認められる。彼はまた、時間も「発達のレベル」だと考えている。

図2のもとになったウィルバーのオリジナルな図には [ウィルバー 2002 89]、各象限の発達の段階が、中心から発する平面上の矢印の方向に、次のような順序で記入してある。

- ・「それ」(右上) 象限：組織段階→辺縁系→新皮質→その他。
- ・「それら」(右下) 象限：生存のための群れ→民族的な部族→封建的国家→連合国家→価値の共同体→統合的共有→ホリスティックな網目構造/狩猟的→鋤農業的→農業的→

産業的→情報的。

- ・「私」(左上) 象限: 本能的(ベージュ) →呪術的(パープル) →自我中心的(レッド) →神話的な自己(ブルー) →達成者的な自己(オレンジ) →感受性ある自己(グリーン) →統合的な自己(イエロー) →ホリスティックな自己(ターコイズ)。
- ・「私たち」(左下) 象限: 古層的→アニミズム的 - 呪術的→力の神々→神話的秩序→科学的 - 合理的→多元的→統合的→ホロニック/前近代→近代→ポストモダン。

なお、「私」象限に記入された括弧内の色は、ドン・ペックとクリス・コーワンによる「ミームの色」である(cowan@spiraldynamics.com)。上に引用した各象限8つの「発達の段階」を、より理解しやすいように、それぞれがスパイラル状態で発達する、増大する統合的な包括の波(入れ子の中の入れ子という)「身体・心・魂・霊」の4つのレベルで示すこともできる。ウィルバーによると、「こうした多様な構成要素ないし流れについて、もっとも驚くべきことの一つは、それらのほとんどは相対的に独立したかたちで発達する」が、各象限は相互に関係してもおり、例えば左上象限にある「個人の意識は、客観的な有機体や脳(右上象限)、自然、社会システム、および環境(右下象限)、そして文化状況、社会的価値、および世界観(左下象限)と分かちがたく織り込まれている」。ただし、私は、ウィルバーの四象限の枠組みは受け入れるが、後述する理由により、「環境」や「自然」を右下象限内に閉じ込めてしまうことには賛成できない。そのように「環境」を1つの象限に閉じ込めてしまうと、「環境」のもつ全象限的性質を見落としてしまう危険がある。しかし彼が述べるように、各象限が「相対的に独立したかたちで発達すること」については、現代世界が科学技術の突出した発達によって、右象限だけが異常に発達したいびつな世界になっていることから、彼に同意する。私はそのいびつな発達の具体的な現れが環境問題であると理解する。

更にウィルバーは、これまでに発表された様々な理論が、「しばしば一つの象限に焦点を当て、しばしばその他の象限を排除してきた」と指摘している。すなわち、物理学・生物学・神経学などのハード・サイエンスは右上象限を、社会学・経済学などのシステム科学は右下象限を、現象学・内省的心理学・意識の瞑想的状態などは左上象限を、そして価値・概念・世界観・文化などの理論家は左下象限をもっぱら対象にしてきた。これら既存の学問領域とは異なり、彼が推奨する統合的アプローチは「全象限・全レベル」を対象にしている。私は第1論文で、環境問題の複雑さについて検討したが、まさしく環境問題こそ「全象限・全レベル」にまたがる統合的アプローチを必要とする問題であった。この意味で私は、「環境」そして「自然」を右下象限内に閉じ込めてしまうことに賛成できないのである。ギリシャの古代都市ミレトスの人タレスが、「万物の原理は水である」といったように、環境問題を考える際には、「自然」の一部である「水」も、「環境」と同様に全象限の中に織り込まれていることに留意する必要がある。それについての具体例は、「VI、麗江古城の環境論」で詳述する。

ラズロの提唱する哲学は、量子物理学の相補性の概念を取り入れた統合的な非二元論の「新しい哲学」であり、ウィルバーの概念的な「万物の理論」にとっての科学的基礎を提供する。ラズロは、唯物論と観念論は相補的な関係にあると主張する。すなわち、「宇宙は相反する2つの面を持っている。つまり物質(物質のようなエネルギーを拘束した実体のかたちをもつもの)と心(生きた経験の流れのなかに現れるもの)は、別のものではあるが相補的なアスペク

トである」と。彼は、生物と環境の関係について次のように述べる。「生物の外部環境で起こったことは、何らかの形で生物の内部環境にも反映される」、「実験室での実験によって、遺伝子と環境の相互結合が存在することが示された」と。

ラズロの哲学は、「宇宙にはこれまで知られていなかった形と水準での統一性があるのではないか」という疑問から出発して [ラズロ 1999]、「自然のすべては、目標を生成し、自己進化するシステム」であるとの認識に到達するまでの、彼がたどった思考の過程の記録である。彼は重力、電磁気力、弱い核力、強い核力と並ぶ、まだ発見されていない第5の場があるのではないかと考える。ラズロは、最終的に自らがアーカーシク・フィールドと命名したその第5の場には、過去の全ての情報が記録されており、その場を介して宇宙のすべてのものが「つながりあっている」のではないかと推測する。彼は、自分の哲学を「進化論的汎心論」と呼んでいるが、それはポスト近代社会の構築に必要な「新しい知」の基礎となる哲学になり得る。

ラズロによると、「汎心論とは、すべての存在には心がある、心は世界のなかにあまねく存在する、とする哲学的な立場である。『汎心論』を『進化論的』と修飾したのは、心はすべての存在に、一様に、同じ成熟度で分布しているのではないという見解を明示するためである。私たちは心も物質と同じように進化すると主張する」 [Laszlo 2004]。

クオリアを追求して仮想に至った脳科学者、茂木健一郎(2004)は次のように述べている。「意識が存在するということを、科学的世界観と整合性のある形で説明するには、おそらくとてつもない天才の出現を必要とする。ニュートンやアインシュタインの比ではない。凄まじい知力と胆力を持った超人の出現を必要とする」、「近代において知の王座についていた科学は、『今、ここ』の因果性に極限化した説明原理を提供するが、私たちの意識の起源も、仮想の世界の存在基盤も説明し得ず、単なるテクノロジーの知と化している。デカルト以来の近代主義は方法論の困難に陥り、今終わりを迎えつつあるのである」と。

ラズロの進化論的汎心論は、彼自身も認めているように、今はまだ「寓話」に過ぎないが、21世紀中に科学の大きなパラダイム・シフトを経て「新しい知」に発展する可能性を秘めている。茂木流に表現すれば、ラズロの仮想が「現実」として立ち上がってくる可能性が強い。「新しい知」が今後の研究によって真の「万物の理論」として受け入れられるようになったとき、私が第1論文で述べた「自然の価値」についての普通の人々の「常識」は「確信」に変わることができ、中国やアジアの途上国だけではなく、先進工業国においても、「次なる社会システム」の構築に向けた汎地球的な歩みが始まるものと期待される。

Ⅲ、中国の環境問題

中国政府が2001～2005年度の第10次5カ年計画で掲げた目標は、GDP成長率が年7%程度、2005年の1人当たりGDPが9400元、都市部の雇用増が4000万人、失業率が5%以内などであった。実際の経済成長率が年平均9%台に上ったおかげで、目標値は達成された(朝日新聞2006年1月12日)。しかし先進工業国の経験から明らかなように、「自然を無視」した産業資本主義的経済活動を行えば、環境問題という外部不経済の発生は避けられない。日本のマスメディアが伝える情報などから判断すると、中国が行っている社会主義市場経済活動も、かなり深刻な環境問題を発生させているようである。それが事実ならば、中国における過去の高度経済成

長は、かつての先進国と同様に「自然を無視」して行われてきたことになる。私たちは 2004 年度に山西省で [樞根 2005]、また 2005 年度に雲南省で [樞根ほか 2006b]、また 2006 年度には新疆・寧夏・内モンゴル・遼寧省・吉林省で、各年度それぞれ 2 週間ほどかけてフィールドワークを行ったが、これらの内陸地域でも、大気汚染、水質汚濁、土壌劣化、山地荒廃などによる環境問題が発生していた。経済活動の活発な中国の沿海工業地帯で、より深刻な環境問題が発生していることは想像に難くない。

沿海部の急速な発展によって、中国内に大きな経済格差が生じている。そのための措置として採られたのが「西部大開発」である。「環境」の立場から見ると、いま中国という国は、抽象的な意味での「自然との和諧」ではなく、具体的な「西部大開発地域における自然との和諧」という極めて重要な問題に直面している。「新しい哲学」によると、すべての自然は「生成・進化するシステム」である。自然システムは同じ状態であり続けることはない。人間も自然の一部である。社会システムもまた生成・進化する。もちろんその生成・進化の方向と速度には、人間の意志も関係する。環境研究会の主旨としての私の、現在の最大の関心事は、近代化・工業化の進んだ沿海部の陰に隠れている「開発の遅れた内陸の農牧山村地域における自然との和諧」である。沿海部の環境問題には、先進工業国との間で本質的な違いは認められないから、環境対策も先進国の経験を参考にすることができるし、中国独自の「循環経済」という政策もすでに実行されている [愛知大学国際中国学研究センター編 2005 ; 2006]。

開発の遅れた内陸の農牧山村地域は、「環境」の視点から、乾燥地域と湿潤地域、つまり水のある地域と水のない地域に大別することができる。水のある地域では、「自然との和諧」の基本は、水循環の機能をどのような方法で、どこまで発揮させることができるかにある。水のない地域では、多分、太陽エネルギーの恵みをどのような方法で、どこまで生かすことができるかにあると思うが、更なる検討は今後の課題としたい。いずれの地域でも、「新技術」の果たす役割は大きい、それと同時に、伝統的な知の果たしてきた役割も重要である。「自然との和諧」の実現には、今後 100 年程度の長期にわたる不断の努力が必要になるであろう。

前述したように、私は、環境問題を「自然と人間の関係は如何にあるべきかを考える問題」と定義して研究活動を開始したが、研究を進める過程で、この定義自体がデカルトの二元論の二項対立的枠組みに捉われていることに気づいた。幸い私たちは、2006 年の 4 月に、2 週間ほどの短い期間ではあったが、麗江古城の水と社会の調査をする機会を得た [樞根ほか 2006a]。その際、麗江の「環境」にウィルバーの「万物の理論」の枠組みを適用して（後述する表 2、表 3）、二元論とは別の道を探すことを試みた。その成果は、まだ旅人の印象記に近い予察的段階の報告にすぎず、さらなる継続調査を必要とするが、今後の「自然との和諧」の在り方を考えるための 1 つの資料として、以下に述べる。

IV、麗江古城の環境論

1、世界文化遺産、麗江古城

雲南省の少数民族であるナシ（納西）族の誇り麗江古城は、1997 年 12 月 6 日に世界文化遺産に登録された。甚大な被害が発生した雲南大地震の翌年のことであった。麗江古城のこの成功とは対照的に、麗江のすぐ南で同じ目的のために準備中だった白族の城壁都市大理古城は、

地震の被害の深刻さも一因で世界文化遺産への登録をあきらめた。両者の明暗を分けたのは、ナシ族文化と白族文化の間に見られる伝統の強さの差であった。現在の麗江市の人口は約 110 万人、その内でナシ族は 23.4 万人で、市域の面積は日本のどの県よりも広い。行政単位である「麗江古城区」では、1997 年の時点で人口 2 万 5,300 人のうちナシ族が 1 万 6,900 人であったが、現在では人口約 3 万 5,000 人のうちナシ族は 1 万人以下にまで減少している。漢族などがナシ族の民家を借りるなどして、観光客相手の商売を始めたからである。北方の遊牧民だったナシ族が、今から 1200 年以上前に南下して、麗江盆地で最初に定住した場所は玉龍雪山の麓にある白沙村だった（図 3）。この村には玉水寨（図 3 の②）という豊富な水の湧き出すナシ族の聖地がある。次にナシ族が拓いたのが山裾の「泉の村」東河（別名龍泉村、同③）である。白沙古鎮と東河古鎮は世界文化遺産に登録された麗江古城の一部を構成する。彼らの 3 番目の開拓地が、茶馬古道の交易のまち麗江古城（同⑭と⑮の間）であった。ここにも象山から湧き出す水を貯める黒龍潭があり、古城区内には数箇所ですべてが湧き出している。表流水の乏しい石灰岩地帯にあって、ナシ族は水の湧き出す土地を求めて開拓を続けてきたのである。

遊牧民が流れる大水と出合ったときに感じた大きな喜びは、インド・アリア人の聖典『リグ・ヴェーダ』によって今日まで生き活きと伝えられている。それが古代インダス文明の始まりになったことについては『水と女神の風土』で詳述したとおりである [樞根 2002]。後述するように、ナシ族の思想の根底には水の恵みに対する大きな感謝の念がある。ナシ族にとって水は神である。その思想は、最初から水の恵みを楽しむことのできた湿潤地域の民族の思想よりも、水への思い入れがはるかに強い。

私たちが麗江で調査を行った理由をキーワードで示すと、「水・環境・辺境・少数民族・ナシ族文化・自然と人間の調和・エコツーリズム」となる。この面積わずか 3.8km²の狭い麗江古城へ、2005 年には 400 万人以上の観光客が季節を問わず訪れたといわれる。都市の規模は 2 桁近くも違うが、京都は日本の麗江だとも、麗江は中国の京都だともいわれる。麗江古城は、近代生活や都会生活に疲れた人にはとても心地よ



図 3 麗江盆地周辺の概略図

いまちなのである。まだ日本からの観光客は多くはないが、交通の利便性が増せば、若い女性を中心に急増するであろうことは間違いない。《人々はなぜ麗江に惹きつけられるのだろうか？ 麗江の魅力が失われることのないように、このまちの環境を健全に保持していくにはどうすればいいのだろうか？》以下、図2の「万物の理論」を適用して、時計回りに、麗江古城の四象限について述べる。

2、麗江の水循環（右上象限）

降水として地上に到達した水は、地域の循環場である地形・地質の中を循環する。図3は旧ソ連製の10万分の1地形図をもとに作成した調査対象地域の概略図である。麗江盆地は東西両縁をほぼ南北に走る断層の活動によって形成された南北23km、東西4～5kmの細長い地溝性小盆地である。盆地底は西に傾いており、その南北傾斜は北ほど急で、清溪水庫の数km北方が傾斜の変換帯に当たり、この付近から南では傾斜が緩やかになる。この盆地の地下水流動系は、大きく見て盆地の北半分が涵養域、南半分が流出域に区分される。行政的な「麗江古城区」は獅子山と金虹山の間に位置し、地形の全体配置とその乱れから、この付近を東一西および北北西一南南東方向に走る断層の存在が想定される。想定されるその東一西断層の西方延長上に位置する拉市海^(注3)は流出河川をもたず、湖水は、湖の西南縁にある穴から地下水として流出している。

この付近一帯の地質は石灰岩であり、断層活動による亀裂系も多数存在するはずであり、そのような亀裂系の目視可能なものが上に述べた穴である。図3、図4に記入した丸数字は現場で水質を測定した地点番号を示し、図5に記入した数字は、図3と図4の丸数字に対応する。そしてこれらの数字は、水温と電気伝導度の測定値の一部を整理して示した表1の丸数字の地点番号と対応する。比較のために、2005年8月の雲南省調査時の3地点（中国科学院地理科学与資源研究所による測定値）と、2006年1月に私たちが行った南京調査時の2地点の測定値も記入してある。電気伝導度（EC）は水中に解けているイオンの総量を示す値であり、この数字が大きいほど天然溶存成分や汚染物が多く含まれており、水循環とくに地下水循環を追跡する際の有効な指標となる。

「民国製雲南省十万分一図二百一号」地形図上では、黒龍潭の少し北に地下水の流出域であることを示す湿地帯が存在する。この湿地帯から流れ出す水は、現在のように黒龍潭へ向かってではなく、もっと南まで流下して玉水寨から流出してくる川へ合流している。現在の清溪水庫は、この湿地帯の一部を人工改変して造った浅い貯水池だと考えられる。象山から流出する地下水はこの清溪水庫に一時的に貯留され、そこから黒龍潭へ送られる。黒龍潭の東側の湖底一帯にも象山からの地下水が湧き出しているため、現在の麗江古城の水源はすべて象山からの湧水に依存していることになる。麗江の年降水量は953.9mmで、その81%は6～9月の期間に集中して降る[李 2001]。また麗江古城は、チベット高原の南につづく標高2400mの高地に位置するため、水蒸気圧が低く、蒸発強度は強い。このような比較的乾燥した土地でありながら、麗江古城は、複数の断層が交差する、地下水の流出しやすい、極めて水に恵まれた場所に立地しているのである。

図4は麗江古城周辺地域の詳細図であるが、市販されている地図帳の市街図から作成したもので、縮尺・方位とも正確ではない。外郭道路である民主路、長水路、祥和路、金虹路に囲まれた部分が麗江古城区で、麗江古城には中国の都市としては珍しく城壁がない。古城区には1階建てか2階建ての木造瓦屋根の民家が密集しており、近代的なホテルや商業ビルは新城區に建てるよう規制されている。黒龍潭から流れ出る玉河は、古城の北の入口にある玉河広場に設けられた堰（図4の⑦の直下流）で西河、中河、東河の3つに分けられる。自然河川である玉河の延長が中河である。中河が地形面を少し浸食して浅い谷を刻み込んでいるという事実から、古城区付近は緩やかな隆起傾向にあると解釈される。

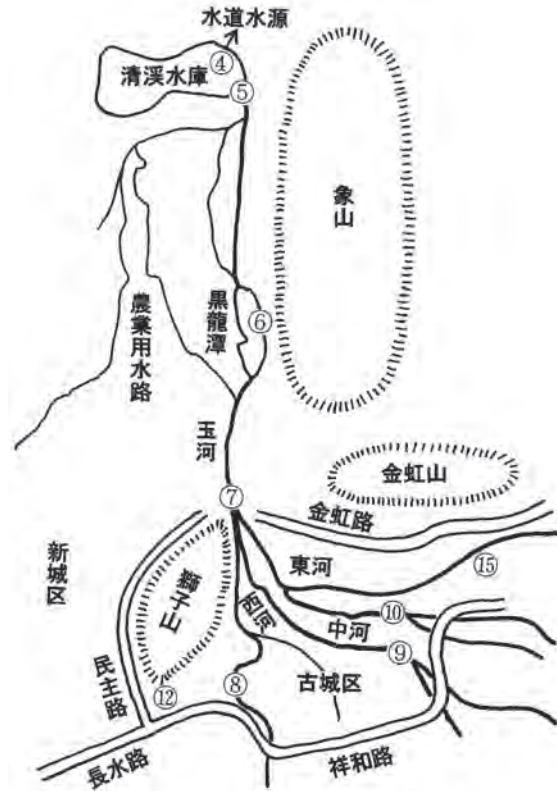


図4 麗江古城周辺地域の地形と水文

図5は、観光客用に市販されている「麗江古城示意図」を基図に用いて、その中に、現地調査によって確認することのできた水路・湧水・井戸の位置を記入したものであるが、この図も縮尺・方位とも正確ではない。私たちは図5の範囲内で湧水を6ヶ所確認したが、獅子山中腹の湧水⑩を除いた5箇所はいずれも後述する「三眼井」として利用されている。地下水水面は南へ行くほど浅くなり、手押しポンプで地下水を利用している民家もある。中河沿いの2つの三眼井と2つの開放井戸はいずれも公共用で、このう

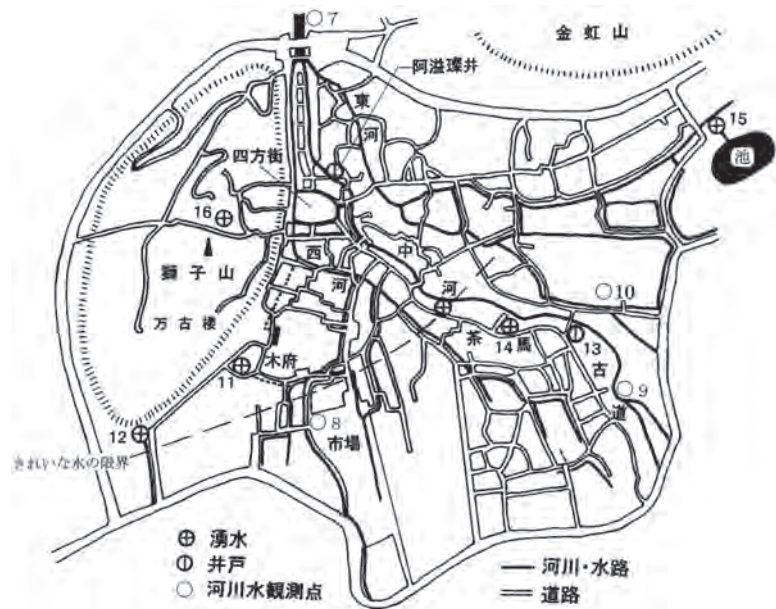


図5 麗江古城の水路（川）と湧水の分布

ちの茶馬古道に沿った3つは茶馬古道北東側に形成された段丘崖の下の湧水（地下水）を利用している。表1で明らかなように、象山系のEC（電気伝導度）が $300\mu\text{S}/\text{cm}$ 前後であるのに対して、獅子山系と金虹山系の湧水（⑪⑫⑬⑭⑮⑯）のECは $479\sim 626\mu\text{S}/\text{cm}$ と大きい。これは麗江古城の水源である象山と、獅子山および金虹山の地質の違いに由来する。その原因として考えられるのが、想定した複数の断層の活動による獅子山および金虹山の基盤岩の破碎である。獅子山系の3つの湧水で、ECが⑯<⑫<⑪の順に大きくなっているのは、涵養から流出に至るまでの地下水流動経路の長さの違いによるものと解釈される。地下水の水質は、帯水層を構成する岩石と地下水との接触時間の長さの関数として進化するが、その接触時間は流動距離の関数だからである。^(注4)

表1 麗江の水質（宮沢哲男作成）

地点番号	名称	高度 m	水温 ℃	EC $\mu\text{S}/\text{cm}$	pH	流量 l/sec	備考
①	玉峰寺姉池	2690	10.6	134		10.30	玉峰寺、チベット仏教、姉妹池の姉の出口
②	玉水寨	2710	9.7	133	8.84		姉の湧き水地点、妹の方は水が取れず。昼食
③	東河古鎮	2460	15.2	301	8.11		東河古鎮の最上流西の湧水池
④	清溪水庫	2430	15.5	305	8.01		清溪ダム北部の湧水付近
⑤	黒龍潭	2440	14.2	290	8.21	1918.00	黒龍潭流出口下
⑥	珍珠泉	2440	15.2	291	7.90		黒龍潭に湧き出す泉、線香で祭られてあった
⑦	玉河広場	2390	14.2	291	8.14		水車上手からの出発点、 $Q\approx 1\text{m}^3/\text{S}$ (目算)
⑧	西河市場	2390	14.6	265	8.14		西河、市場手前の水路
⑨	中河	2390	14.1	298	7.92		中河： $Q\approx 250\sim 350\text{l}/\text{S}$ (目算)、2つに分流する直前
⑩	東河	2400	14.2	293	7.97		東河、第一高級中学校前、 $Q\approx 20\sim 30\text{l}/\text{S}$
⑪	三眼井	2440	14.5	626	7.40		光碧巷三眼井、獅子山からの湧水
⑫	白馬龍潭	2420	15.5	523	7.65	22.60	白馬龍潭(三眼井)、獅子山南麓からの湧水
⑬	月季井	2430	15.2	378	7.60		茶馬街道北側の段丘崖下の開放井
⑭	石榴井	2445	14.4	307	7.75		三眼井(石榴井)
⑮	甘澤泉	2400	15.9	662	7.75	10.27	桑さん宅南の三眼井、 $Q\approx 30\text{l}/\text{S}$
⑯	獅乳泉		15.7	479	8.50		獅子山中腹の湧水
参考1	属都湖	3614	15.1	35	7.70		ジャングリ近郊の高原氷河湖
参考2	金沙江	1419	18.8	445	8.27		麗寧十八湾を降りたところ、長江の上流
参考3	昆明の?池	1891	24.2	469	9.63		中国で最も汚染の著しい湖の一つ
参考4	南京の長江		19.0	314	8.14		棧橋脇、温排水の影響の可能性あり
参考5	蘇州の留園		7.3	977			庭園の池の水

注) 流量データは「麗江納西族自治州志」による。高度は参考程度で精度は低い。

麗江古城を縦横に流れている水路の水は、住民の生活に密着した、人体の血脈に例えることができるほど重要な水であり、麗江古城に独特の水文化を生んだが、実をいうと、元朝年間に開削された西河の本来の役割は、ナシ族に地方自治権が認められて、この地に行政府（木府）が設けられたとき、風水思想に基づいて木府へ「氣」を引き込むために造られた導水路であった。東河は清代の「改土帰流」^(注5)後に、中央から派遣されて来た官僚の住居地へ水を流すために造られ、後に農業用水として利用されるようになった。ナシ族には姓はなかった。ナシ族の首長は、明の皇帝朱元璋から「朱」の字の一部をもらって「木」を姓とした。木氏は元、明、清三朝 22代 470年にわたってこの地を治めた。麗江に城壁がないのは、木を城壁で囲むと困となるので、困りごとの発生を避けるためだったと伝えられている。これは話としては良くできているが、城壁を造らなかつたより重要な理由は、後述するように、ナシ族の「心」が他の民族に対して「開かれて」いたからではなかつたかと推察される。

麗江古城区の南と北では約 10m の高低差があるので、水路の水の流速は比較的速い。しかし西河について見ると、その本来の目的は木府へ水を送ることであり、木府へ引き込まれた水は、図 6 のように、木家院の南にある池に貯えられてから、二手に分かれて護法殿、万卷楼、議事庁の周りを一周し、木府へ「気」を引き込んだ後に、木府の外へ放流される。

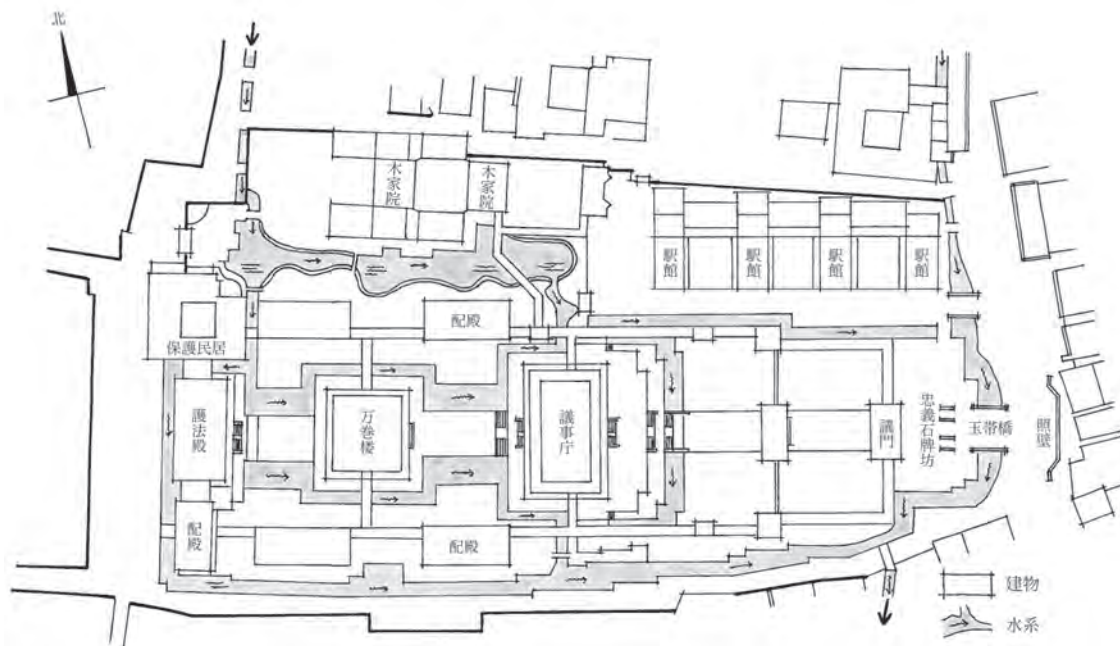


図 6 木府へ「気」を運ぶ水の流れ（樊炎冰 2005 を参考に作成）

このように二重の水路に囲まれたかつての木府の姿は、水上に浮かぶ船に例えることができよう。ただし、木府が観光客に開放されるようになった現在では、図 6 に記入してある水路の半分近くはすでに埋められてしまった。「気」や「風水」は、古典的科学によってはその実体が確認されていない概念であるが、中国科学院の指導する『中国国家地理』が 2006 年初めに風水特集号を出したことから分かるように、最近では科学的関心も高まってきた [中国国家地理 2006]。現在でも、西河の主目的は木府と市場への水供給にあるので、今回の調査時にも、図 5 で西河から東南方向へ分流した水路の水には古城区の端まで達するだけの流量はなかった。この東南方向へ分けられた水路の水が一度消滅し、破線の手前で再び流れだすのは、破線の地区で観光用の商店や旅館の新築工事が行われており、その工事現場から水路へ排水された地下水が水路の中を流れていたためである。図 5 の 15 (表 1 の⑮) の湧水の先にある池の存在と併せて考えると、麗江古城区の下流側境界付近では、地下水面は地表面のすぐ下にある。以上の考察から麗江古城区は、扇端部に湧水帯のある扇状地に類似した水文地形特性を有していることが分かる。

目視で判定した「きれいな (透明な) 水の限界」が図 5 に弧状の破線で示してある。ただし、日中の人間活動による水汚染への影響を調べる目的で、同じ日の朝方と夕方に、古城区出口付近の同一地点で測定を行ってみたところ、EC は、西河では朝 $265 \mu\text{S}/\text{cm}$ ・夕 $279 \mu\text{S}/\text{cm}$ 、中河

では朝 298 μ S/cm・夕 286 μ S/cm であり、その時間変化は誤差の範囲内に収まるものだった。麗江古城区では下水は分流式を採用している。住民が水路の汚染防止に努力していることも加わって、日中の人間活動による水路への水汚染物質の負荷は軽微なものであった。

水循環に伴う水質進化を、表 1 の参考 1～5 も含めて簡単に考察してみたい。私たちがこれまでに、中国科学院地理科学与資源研究所と共同で測定した中国での EC の最小値は、雲南省の香格里拉郊外の属都湖（参考 1）における 35 μ S/cm であった。高地に降る降水で涵養されたばかりの、まだ進化の初期段階にある湧水の EC は、世界中どこでもこのように 50 μ S/cm 以下の低い値を示す。①や②の 130 μ S/cm 程度の湧水は、石灰岩地帯ではあっても、これらの地下水の年齢が若く、表層風化帯中を速く流れる山地急斜面の地下水に由来するためと考えられるが、岩盤中の割れ目を流れる場合でも流動距離さえ短ければ同様の水質に進化するであろう。しかし基盤岩中の割れ目をゆっくり流れて山麓で湧出する地下水の EC は 300 μ S/cm 前後となる。300 μ S/cm という値は、日本でならば尿尿汚染が疑われるほど高い値であり、飲用不適の水となるが、麗江盆地では汚染が原因ではなく、石灰岩地帯における地下水特有のカルシウム・イオンなどの含有量が多いためと解釈される。前述したような理由で、獅子山系と金虹山系の湧水の EC は 600 μ S/cm 前後と高い。参考 2 は、麗江から瀘沽湖へ行く途中にある麗寧十八湾のつづらおりを一気に高度約 500m 下った地点で測定した金沙江本流の値である。私たちはこの近くで、レストランのトイレの洗浄水が金沙江へ未処理のまま直接放流されているのを目撃しているから、445 μ S/cm という高い値の少なくとも一部は人工的な汚染によるものであろう^(注6)。長江の河川水の EC は南京まで流下すると降水による希釈効果や自浄作用などで 314 μ S/cm と低くなる。しかし汚染の著しい「三湖」の 1 つである太湖の下流に位置する蘇州の留園の池水は 977 μ S/cm と高かった。

以上の考察から「麗江古城は水循環や風水の観点から理想に近い場所に立地している」と結論することができる。麗江古城は、象山からの湧水を起源とする安定した、清澄な水源を有し、その水を流すのに必要な適度の重力資源（傾斜）にも恵まれている。想定される断層活動で形成された獅子山と金虹山は、この地に景観美を付与するとともに、古城内の湧水の涵養源としても機能している。黒龍潭から流れ出す玉河沿いの水と緑は、茶馬古道を往来する旅人に心地よい水辺環境を提供してくれた。このような極めて水条件に恵まれた土地であったからこそ、ナシ族の人々は水の流れを巧みに活かした独自の水社会システムや水文化を生み出すことができたのである。

3、麗江の社会システム（右下象限）

麗江の繁栄は木府の経済力によるところが大きい。そのような富の蓄積を可能にしたのは、この地が茶馬古道と西南シルクロードの交通の要衝を占めていたからである。しかし本稿では経済の問題には立ち入らず、フィールドワークで情報を得ることのできた水に焦点を合わせて、麗江の社会システムを見ていくことにしたい。

三眼井：三眼井は三疊泉とも呼ばれる。これが古城観光の目玉の 1 つであることは、ポンプで水を供給する「観光用三眼井」が古城東南部の新しい広場に最近つくられたことから明らかである。住民が現在も生活用に利用している、図 5 に示した 5 つの三眼井（⑩を除く 5 つの

湧水)のうちで、最も典型的といわれる「一井三潭」が⑪の光碧巷三眼井である^(注7)。半月形の石囲いのある、地下水が湧き出している上泉の水は飲料用で、中泉では食品を洗い、下泉では衣服や臍物を洗う。水は上泉→中泉→下泉へとかけ流され、汚れた水は下泉から排水路へ溢れ出す。三眼井の脇には大きな赤い字で「用水公約」を彫った石版が立ててあり、光義街居民委員会、光碧巷の名で「用途別の泉水利用は伝統です。洗った後はゴミを残さず各自で清掃して片付け、ごみや汚物を泉のそばに放置しないようにしましょう。人が健康に暮らせるように水源を清潔に保ちましょう」と訴えている。早朝にここへ行くと大きなポリエステルのタンクをもって水を汲みに来る人に何人も出合う。⑫の白馬龍潭の規模は⑪の2倍以上もあり、いつも人々で賑わっている。

東河古鎮にある三眼井の傍らに立つ看板には次ぎのように書かれている。「“水は万物をよく利するが争わず”。水はまた汚れやすき貴重なる資源。遊牧時代には、ナシ族は水を生命の源泉とみなし“水草を探し求めながら暮らした”。農耕定住の時代には、彼らは村に水を引き入れ、一つの水を三つに分けた。水の傍で便利な生活を十分に楽しんだ。都市の時代になって、“三眼井”文化を創造した。湧き出す水を三つの池にかけ流し、一番目を飲用水、二番目を洗菜水、三番目は洗濯水にと、一筋の水を三つに用いた。争わず逆らわず、これが自然を敬慕するナシ族の証であり、環境を心から愛するよき伝統である」と。東河の看板のこの文章から、麗江古城がナシ族の伝統を受け継いでいることがよく分かる。この短い文章からも、インド・アリア人の場合と同様に、遊牧民だったナシ族が、流れる水と初めて出合ったときの喜びが伝わってくる。

放水冲街：東河古鎮の中心にある地元特産品街には、ここで毎日行われている観光行事「放水冲街」の看板がある。ここでは14時になると、上手の水路を堰き止めて、水を水路から溢れさせ、水流の勢いで広場のゴミを洗い流す様子を、観光客に見せている。5つの街道が集まってくる麗江古城の四方街でも、大量のゴミが出たので、ここでも毎日「放水冲街」が行われていた。麗江古城では、人工の西河は獅子山寄りの高所を走るように設計されているので、四方街ではこの西河を堰き止めて、水を広場へ溢れさせ、広場の清掃を行った。広場に溢れた水を受けるために、広場の三方には中河へ流れ込む排水路が設けてある。当時のゴミはほとんどが有機物であったから、流れてくるゴミを中河の下流側で掬い上げて、畑の肥料にした。まさしく流れる水は有力なネグントロピー源である。また「循環経済」の萌芽をここに見ることができる。麗江古城では、風水思想を導入することによって、水の機能を地域社会の中で最大限に発揮させることができたのである。

水路：ナシ族の人々は水に特別な感情を抱いており、「自分の眼を護るがごとくに水を護る」といわれる。したがって水源は最も美しい眼となる。彼らは水源に対して畏敬と崇拜の念を抱いている。麗江古城では住宅から水路までの距離が最大でも50mを超えない。水路に沿って造られた麗江古城の街並みは「家々門前繞水流 戸々屋後垂楊柳」と詠われてきた。水路にものを投げ捨てることは、神を怒らせる恥ずかしい行為として厳しく禁じられていた。街中では、下流の人々のことを思って水を汚さないように、朝は水路で洗濯を行わなかった[林2003]。日中でも洗濯水は水路へ流さず、天然の五彩花石を敷きつめた石畳の道路の上に撒いた。この伝統は今でもある程度は生きている。私たちは早朝に水路のゴミ拾いをしている人々にしばし

ば出会った。尋ねてみると、答えは「ボランティア」のことも、「仕事」のこともあった。水は古城の末流に近い市場内でも最後まで大切に使われていた。

橋：麗江古城は、ロシアのサンクトペテルブルクに似た橋のまちでもある。ただし京都の場合と同様に、まちの規模は2桁近く小さい。石橋、木橋、丸太橋、板橋、めがね橋、アーチ橋など様々な橋を見ることができる。一般に中河にかかる橋は大きく、石橋が多いが、西河と東河では小さな板橋も多数見かける。橋は350もあるといわれ、水路が縦横に走る古城区の人々を結ぶ通路として欠かせない。水と橋はナシ族の魂ともいわれる。昔は橋のたもとに市が立ち、それを橋市と呼んだ。橋ごとに違った品物が売り買いされた。その証は鴨の卵が売られた「鴨蛋橋」、鶏と豆が売られた「鶏豆橋」など、橋の名前として残っている。また四方街の大きな石橋では鷺と薬草が売られていたという。橋、水路、古い家、玉龍雪山、そしてナシ族は、併せて「古城最美的画面」と語られている。

夜景：麗江観光の最大の目玉は夜の食事とショッピングであろう。古城には現在1600余りの店舗があるというが、水路の両側にびっしりと並ぶ飲食店や土産物屋の軒には赤提灯がぶら下がっており、その灯が水路の水面に映えてゆれる。このようなのどかな夜景を見ながら、旅人は酒を酌み交わし、胃袋を満たし、お土産の品定めをする。土産物に手の込んだ美しい手工芸品が多いのは、かつて商業と手工業のまちとして栄えた名残である。飲食店の前では民族衣装を着た若い娘さんたちが客を招いている。彼女らは必ずしもナシ族とは限らず、白族や摩梭人も少なくないが、民族の如何を問わず、彼女らはナシ族の「開かれた心」を共有しているように見える。彼女らは、旅人に微笑みかけ、歌を歌い、興が乗れば客と一緒に踊ったりもする。麗江は冷房も暖房も必要ないといわれるほど温暖な地で、商店のはめ込み式の表戸は、店が閉まるまで外されたままである。都会でストレスの多い生活を送っている人々には、深夜まで続くこの開放的な雰囲気がやすらぎの場として貴重である。夜の四方街広場では、ナシ古楽が奏でられ、老若男女が合唱を楽しみ、観光客も混じえて踊りの輪が広がっていく。端から端まで歩いて2kmほどの身の丈に合ったこの空間へは、自動車の侵入は禁止されている。古城内は、排気ガスとも自動車事故とも無縁な散策の場である。

渇水：古城の水源は地下水に由来するため安定しているが、聞き取りによると、83年は大旱魃で黒龍潭の湖底が露出し、麗江古城の水路には水が流れなくなり、まちじゅうが臭くなった。95年以後にも1回ひどい渇水があり、この時にもまちは臭くなった。96年の大地震の時は、水道が不通になり、井戸に頼っていた人々には伝染病の予防薬が配布された。現状では、10年に1回程度発生する渇水時の非常用水は井戸に頼るしかない。渇水の発生頻度が地球温暖化の影響で増加することがないか心配である。

水管理：古城の老人たちの話によれば、麗江古城の水路の管理は、住民主体、生活主体で行われており、権力を握った政府が上から行うものではなかった。しかし、雲南大地震後に麗江では新たな地域計画が立てられ、このときに街並みと共に下水道や水路などが整備された。それ以前は「現在ほど水路の水は綺麗ではなかった」と、私たちは地元の人から聞いているから、この計画を実行した政府の役割を高く評価したい。ボトムアップのアプローチもトップダウンのアプローチも、麗江古城の発展のためには必要であった。大理古城も地震の被害を受け、新たな古城の建設が行われたが、大理古城内に造られた水路をはさむ水景街（紅龍井）からは、

麗江古城の水路網が生活と密着したかつての面影を保持しているのに対して、いかにも人工的で観光用に造られたという印象を受ける。少数民族の伝統的な思想が、大地震のような危機を経験した時に、現実の景観となってその姿を現したからであろう。大理から麗江への道路開通後は、「それまで大理で泊まっていた観光客が麗江まで行って泊まるようになった」と、2005年夏に大理白族の観光ガイドが私たちに説明してくれた。麗江古城のエコツーリズムの最も貴重な資源は、驚くべきことに「ナシ族の心の中」にあったのである。

地域社会の水管理：ナシ族の村には「水管員」という特別な公務員のポストが設けてある。水管員は村民による選挙で選ばれ、主な仕事は、村民を導いて不定期に行う水路の清掃である。水路の清掃時には、まず水源を遮断して、水路の水を全部抜く。水の停滞しやすいところには泥がたまっているので、それを取り除く。水路と道を完全に綺麗にしたら、再び水を引き入れる。このように村民と村民組織を含めた、水や川を保全する地域の仕組みが、日常生活の中に存在していた。麗江古城のナシ族もこの仕組みを取り入れて、古城の水辺環境の保全に努めてきたのである [朱 2006]。

4、麗江の文化（左下象限）

高度な文化は経済力による何らかの庇護を必要とする。470年も続いた木府の経済力がナシ族の文化、すなわちトンパ文化の形成に果たした役割は大きい。トンパ文化として、ここでは「神話」「トンパ文字」「壁画など」の3つを取り上げ、麗江の文化について考えてみることにしたい。なおトンパとは祭司のことで、ナシ語では「知者」を意味し、世襲で、トンパ文化の継承者であり伝承者でもある [徐 2001]。

神話：ナシ族の聖地としてテーマパーク化され、観光客に開放されている玉水寨の神泉の脇に「祭自然神場」がある。そこに立つ石碑には次のような物語が刻まれている。「伝説によると、人類と自然は異母兄弟であった。両親の死後、遺産をめぐる兄弟は争った。その結果、自然神が勝って遺産のすべてを得たが、人類は何ももらえなかった。何もなければ人類は生きられない。後に、天の神がトンパ神 (Dongbashanluo) を遣わして自然と人類の関係を調解 (調停し和解する) した。しかし人類が自然を保護しなかったので、自然神は非常に怒って、“人類は木を切り、私の動物たちを殺しただけではなく、血まみれの獲物を川で洗った。彼らは私を全く尊敬していない。だから自然は、人類と平和でいることはできない” と言った。そこでトンパ神は大鵬という神鳥を送って人類と自然の関係を力づくで調解した。その後ようやく、人類は農地と、草地と、家屋敷を再び手にした。この調解の後、自然神は人類に“神泉のそばで香とヤクの乳を供えて私を崇拝し、森や樹木、鳥や動物たちを保護することを決意し、川で血まみれの獲物を洗うことはしません” と誓うように要求した。後に人類は良い食物を神泉へ持参して自然神を崇拝し、万物の幸せを祈った。旱魃の時は、ナシ族の人々は神泉へきて自然神に雨乞いをするだろう」。

上の物語のほかに、私たちは現地でも次のような物語も聞いた。「人類が自然を破壊したので、天の神は怒り、風水害を発生させて全人類を洪水で流してしまった。しかし現在の人類の始祖となる人だけは、大きな太鼓の中に家畜と共に入れてやったので、彼は水に浮かぶことができ助かった。鶏が鳴いて安全を告げたので彼は太鼓の外へでた。天の神は彼に妻として二人の

天女を与えた。そのうちの一人が自然を生んだ。もう一人の天女が三兄弟を生んだが、三人とも口がきけなかった。どうしたらいいかと天の神に尋ねると、神は“地上へ降りてから、お前は祈ったことがないではないか。天の神に祈れ。”といわれた。祈りを捧げたら子供たちは口がきけるようになった。その三兄弟がナシ族（の始祖である三朵神）と、蔵（チベット）族と、白族である。」

上の2つの物語についての詳細な検討は、より正確な資料入手後の課題に残しておくことにし、ここでは次の3点だけを、ナシ族の文化の背後にある重要な思想として指摘しておきたい。第一に自然と人間の関係を「調解」されるべきものと捉えていること。第二にこのように自然を敬うエコロジカルな思想があったからこそ、麗江古城が生まれたということ。第三に人類を生かすも殺すも「水」次第であり、自然の表象としての「泉」が神と崇められていること。



図7 水に関する事象を表すトンパ文字

トンパ文字：既に 11 世紀には使われていたというトンパ文字は、絵のような象形文字で、ナシ族に「斯究魯究 (sijiulijiu)」と呼ばれている。それは「木を見て木を描く、石を見て石を描く」ことを意味する。トンパ象形文字には約 1400 の常用字があり、象形文字から生まれた表音文字を含めると全部で 2000 余りあるといわれる。トンパ文字の例として、図 7 に、水に関係する事象を表すいくつかの文字を示した。この図で最も興味深いことは、「水」という象形文字が「水が泉から湧き出して低まったところを傾斜にそって流れる様子」を象形していることである。これは明らかに、石灰岩地帯の山間地に住む民族が「水を見て水を描く」方式による記号化である。もしもナシ族が、大陸の河口付近の低平地に住み着いた民族だったとしたら、水をこのようには記号化しなかった筈である。「水を止める (阻水)」や「水を注ぐ (沖水)」という文字は、「放水冲街」という行為が日常的に行われていたことと関係があるかもしれない。「北方」が山を象形しているのに対して「南方」が水の流れる方向によって表されていることと併せて、トンパ文字からは自然環境と文化の密接な関係がうかがわれる。しかし図 7 のトンパ文字には、水が蒸発熱を奪うと「涼しい」ことや、傾斜のゆるいところで水が停滞すると「濁り水」になることなど、どの地域でも通用する、科学的に納得できる表現法の文字も含まれている。

普通の人々は今ではトンパ文字を読むことはできないが、トンパは読むことができるので、トンパ文字は「生きている最後の象形文字」ともいわれる。ナシ族は樹皮や麗江地区特有の虫除け成分を含む「蕘花」などを加工してトンパ紙をつくる技術を持っている。世界記憶遺産に登録された、トンパ紙に描かれた『トンパ経書』は、森羅万象に関する古代ナシ族の百科辞典である。ナシ族が発明した独自の文字は、ナシ族の文化を今日まで維持・伝承する上で大きな役割を果たした。

壁画など：麗江が中国の辺境に位置していたことも幸いして、ナシ族の宗教は、文化大革命の災いを大きく受けることもなく、それに関連する寺院・壁画・音楽・舞踊・占いに用いる木牌画・魂が天国へ行くときに渡る橋となる神路図などの、多様な形態の文化遺産として今日まで生き残ることができ、それらが現在では貴重な観光資源になっている。白沙村の大宝積宮やその他の寺院で見ることのできる大量の白沙壁画は、仏教、道教、トンパ教などの美しいフレスコ画で、過去 350 年にわたって漢族、蔵族、ナシ族、白族などの画工が制作したものであるが、この期間は木氏が治めた時代と重なっている。また、玉峰寺 (図 1 の①) には樹齢 500 年以上と伝えられる「9 葉 18 瓣」の、淡いピンク色の花が咲く大きな雲南「万花椿」があり、「護花使者」の老人が花守りをしている。450 年近い歴史をもち、中国音楽の活化石といわれる「ナシ古楽」も「トンパ舞」と共に、宗教的な行為として継承されてきたものである。

5、麗江の心 (左下象限)

麗江の心とは、麗江古城をつくったナシ族の人々の心である。ナシ族の始祖である三朶神^{サンダ}は、白沙古鎮の北方、玉峰寺の東方に位置する北岳廟に祀られている。北岳廟は玉峰寺などの仏教寺院と比べると今はさびれており、私たちが訪れたときには再建のための寄付集めをしていた。伝説によると、三朶は玉龍雪山を守るために戦ったナシ族の英雄であり、玉龍雪山の化身ともいわれる。前述したように黒龍潭へ集まる水はすべて象山から来るが、玉水寨の看板に「古城

遡源」の文字があるように、ナシ族の人々は麗江古城の水は神泉から来ると信じている。地図上では、玉龍雪山と玉水寨と黒龍潭は一本の直線上に並んでいる。ナシ族の人々の「心」には、玉龍雪山の水が地下水となって黒龍潭へ湧き出していると「見える」のである。それは、バリ島の人々が、ウブドへ流れてくる水の源が神の降りるバトゥール湖からの地下水だと信じていることと同じである。実際は、バトゥール湖から漏れた地下水はその河川水の7～8%しか占めていない[榎根 2002]。インドでも、バリ島でも、そして麗江でも、人々は、自分たちの周りにある自然（特に水）を神として信仰した。そして、人々は神すなわち自然と相互作用を繰り返すことによって「心」をつくり上げた。ケン・ウィルバー(2002)の「自然は心をつくる部品である」という言葉は、和辻哲郎が『風土』の中で述べたと同じことを意味している。

宗教：ナシ族は「万物には永遠の魂があり、その魂はそれぞれの生涯において様々な命と結びついていると信じて」[字坊 RED 2005] いる。彼らは、魂の転生はすべての生きものの間で行われ、動物も人間もすべて平等だと考えている。この考えはインドのヒンドゥー教徒の考えに近い。ナシ族にとっては、命あるすべてのものが神である。彼らはこの地方に長い間伝えられてきたこのようなトンパ教を信じているが、同時にチベット仏教、道教、儒教も受け入れてきた。ナシ族の宗教活動は、内面的な信仰としてよりも、渡辺(2005)が述べているように、外面的な「術」として行われてきた[林 2003]。

開かれた心：ナシ族の心を示す一例として、楊さんの話を述べたい。楊さんは私たちが麗江調査で雇い上げたタクシーの運転手である。彼は私たちの調査を熱心に手伝い、私たちの調査目的を知って、「私の家にも古くから伝わる、枯れたことのない泉があるので」と、私たちに獅子山の山腹に建つ彼の家へ夕食に招待してくれた。彼はもと軍人で、獅乳泉(図4の⑩)の所有者の楊家へ婿に入った。小学生になったばかりの娘が一人おり、妻の両親と5人で暮らしている。この泉に供えられていた線香を見て、私たちは泉が祈りや感謝の念を捧げる場でもあることを確認した。彼の妻と義母は私たちのために一所懸命にご馳走をつくり、家族全員でデザート付きの夕食を共にしてくれた。この時の会話で実感したのがナシ族の「開かれた心」である。麗江古城に城壁がないように、ナシ族の心にも塀はない。楊さんだけでなく、ナシ族の人々はだれもが親切だった。このような「開かれた心」は、彼らの自然観や価値観とも関係しており、かつて旅人をもてなした心に通じるものがあるのではないかと思われる。その「心」が今は古城を訪れる観光客の心を暖めてくれる「資源」になっている。

殉情物語：トンパ文字で綴られた、長いあいだ詠うことを禁じられてきた物語に『殉情物語』[字坊 RED 2005] がある。ナシ族では約100年前まで瀘沽湖の摩梭人のような母系社会が強く残っていた。財産は母親から娘へと受け継がれ、自由な恋愛や、男性が女性のもとへ足を運ぶ「通い婚」も一般的だった[榎根ほか 2006b]。しかしナシ族は極めて感情を大切にする人々で、相手は常に一人で、うまくいかなければ別の相手と付き合うが、複数の相手とは同時に付き合わなかった。相手を選ぶ権利は女性にある場合が多かった。しかし「改土帰流」によって、漢民族の婚姻制度が導入され、一夫一婦制が法律によって義務づけられた。改土帰流後の婚姻制度では、結婚した女性が他の男性と付き合うと不倫になってしまう。「ナシ族はすべての生物は神様であり、人間は愛情を抱きながら生き、そして死んだ後、人々に葬儀を執り行ってもらい、神様になるための道を歩めると考えていました。しかし、不倫した女性は、その倫理に

反した行いによって、死んだ後に葬儀を執り行ってもらえません。葬儀を行ってもらえない人間は、神様になれず、さまよう魂、つまり鬼となってしまいます。」[宇坊 RED 2005]。

改土帰流による一夫一婦制の導入によって、愛情に生きた者が天国へ行けず、神様になれないという矛盾が生じた。そして、それを解決するために「第三の楽園」と「殉情死」という概念が生まれた。それは、親の反対で結婚できない男女や、不倫関係に陥った男女は、愛する者と一緒に殉情死すれば、天国でも地獄でもない、第三の楽園へ行けるという考えである。そこは想像を絶するほど美しく、何の争いもなく、永遠の命を手に入れられる安らかな場所と考えられた。そして改土帰流後、多くの男女が殉情死を遂げた。最近、ヨーロッパでは婚外子の比率が高くなったと報道されている。近代科学の知が絶対的なものではなかったように、一夫一婦制も絶対的なものではない。ボストン美術館と麗江のトンパ文化研究所の2セットのみしか現存しないとされる、トンパ文字で書かれた「殉情物語」の原典を、日本人にも理解できるようにと和訳されたのが『殉情物語』の第一章である。この本の最後に訳者は次のように述べている。「私はずいぶんと長い間、殉情物語を翻訳することができませんでした。それは、私自身、ナシ族に対する誤解があったからです。この物語の背景にある、ナシ族の思想、社会の仕組み、そして取り巻く自然環境を理解して、初めてこの文章が翻訳できたのです」と。

伝統的な民族行為の背後には思想があり、思想の背後には、その思想を培った伝統や「環境」がある。「環境」と関係するものごとの真の姿は、全象限的アプローチをとらなければ見えてこないことを、『殉情物語』の翻訳者である王超鷹は語っている。山西省の五台山で見られたように、宗教施設は自然環境の保存に大きな役割を果たしてきたが[榎根 2005]、麗江の宗教はナシ族の人々の「心」の保存に大きな役割を果たしてきた。

V、展望

表2と表3を参考にして、中国内陸の農牧山村地域における環境問題について、私なりの展望を行ってみたい。まず、近代社会の基本となったデカルト的二元論には、明らかに無理があった。自然と人間は、分離できるものでもないし、対立すべきものでもない[榎根 2006]。第4論文で述べたように、人間の創造性や美意識の源は自然にある。21世紀の人類は「温暖化した地球」という自然とうまく折り合って生きていく以外に方法はない。ナシ族の神話は、そのことを「調解」と伝えている。日本の都市は過密の代表のようにいわれるが、山地の多い日本の国土面積の60%は森林である。情報技術革命の最先端を行き、グローバル経済を引っっぱっているアメリカも、豊かな自然の残る広大な国土を持っている。またアメリカには、移民という形で創造性や智慧を人ごと輸入できる余裕と、懐の深さがある。

ウィルバーやラズロの唱える「万物の理論」は、これまで風土論、関係をみる哲学、全体論などと呼ばれてきた様々な非二元論を統合することのできる「新しい哲学」である。最新の科学の世界観によれば、すべての自然システムは「生成・進化する」。人間も自然の一部であり、社会システムも進化する。ウィルバーによると、進化は「身体→心→魂→霊」の方向に進む。ただし、現代の科学は、身体と心の実在は認めているが、まだ魂や霊の実在性については意見が分かれている。アーカーシック・フィールドに「過去のすべての情報が記録されている」とするラズロの「寓話」が、寓話のまま終わるか、それとも科学の大きなパラダイム・シフトを

表2 方法論と調査の枠組み

象限	ウィルバーの枠組み		麗江のリアリティ		水
右上	それ 外面 個	客観性 ハード・サイエンス 有機体、脳	山川草木 地震 五彩花石	泉	水循環 水量 水質
右下	それら 外面 集団	間客観性 システム科学 社会システム	社会、経済 茶馬古道、王府 エコツーリズム	町内清掃 祭り	水利用 三眼井 水管理
左上	私 内面 個	主観性 意識、心 道徳、宗教 価値観	ナシ族の宗教 殉情物語 天国、地獄 愛の楽園	開かれた心 親切、もてなし 美意識	水神様 水信仰
左下	私たち 内面 集団	間主観性 社会的価値 文化、芸術 世界観	神話、白沙壁画 トンパ舞、ナシ古楽 手芸、工芸 トンパ文字	建築、街並み	水文化

表3 時間を「発達のレベル」として見た麗江における四象限の調和

時間軸	四象限の調和	問題点
過去	調和していたか？	「自然」と「人間」を包み込むより大きいバイは、何だったのか？
現在	調和しているか？	1996年の雲南大地震の前の状況は？ 近代化や観光地化に伴う影響は？
未来	調和を保つには？	物質的な技術の発達に払うと同じほどの注意を、意識の発達にも払わなければならない？

経て「真の万物の理論」に発展するかは、21世紀における科学の最大の問題となるであろう。

自然と人間の不可分性は、ナシ族の生き方からも明らかである。そのような考えをもつナシ族のつくり上げた「水のまち麗江古城」が、いま観光資源として、中国人だけでなく世界の人々の注目を浴びている。私は、「環境」の視点から、雲南省は「中国の希望の土地」であり、麗江古城は「雲南の宝石」だと考えている。過去の麗江古城では、自然と人間のあいだに深刻な矛盾は存在しなかった。それを「四象限の調和が保たれていた」と表現することもできる。ナシ族の民衆にとって麗江古城は、最初は木氏から「付与された空間」であったが、そこに代々居住して水の流れの中で経済活動を行う過程で、その「付与された空間」は「居住する空間」へと進化し、水への信仰がさらに強まり、独自の水文化が形成された。いま観光客が麗江古城に惹きつけられるのは、麗江における「四象限の調和」を、彼らが心地よいものと感じるからであろう。

しかし、すでに「雲南大地震の前には水はすこし汚れていた」という言葉からも推察できるように、近代化の影響は麗江古城にも確実に及び始めていた。雲南大地震後に立てられた地域計画を実行することで、一応この危機は乗り切ることができたかに見えるが、急激に増大する観光客と、それを当てにする観光業者による観光開発は、すでに麗江古城から「生きた地域社会」を消失させつつある[朱 2006]。観光産業は「西部大開発」の大きな柱の1つである。しかし観光産業にも、ディズニーランド的なものから、エコツーリズムまで、様々な形があり得る。私たちの理解では、麗江古城の最も重要な「観光資源」はナシ族の人々の「心の中」に

ある。麗江古城の環境保全是、ナシ族の心の保全を必要条件とする。

今後、地域の共同体組織と、かけがえのない麗江古城の環境を守っていくために、何が必要であろうか。「万物の理論」が示唆する答えは、物質的な技術の発達や、金儲けのための観光開発に払うと同じほどの注意を、意識や心の発達にも払わなければならないということである。言い換えれば、麗江古城の「次なる社会システム」の構築にあたって、全象限・全レベル的アプローチが必要だということである。ナシ族の伝統が生み出した「観光資源」を、金儲けのためだけに消費すれば、その「観光資源」はやがて無くなってしまう。私たちが行った麗江古城の調査によると、中国の「西部大開発」にとって真に必要とされていることは、先進国がかつて行ったような、近代科学技術を駆使してエネルギーと物質を「資源」として大量に消費し、自然すらも「自然資源」として消費してしまうような「急激な開発」ではなく、少なくとも水に恵まれた、少数民族の多い雲南省では、少数民族の伝統的な叡智を生かした「ゆるやかな発展」を行うことであろう。私たちはそのような「ゆるやかな発展」の方に、中国内陸の農牧山村地域の明るい未来を見る。

清水博（2003）は次のように述べている。産業資本主義経済社会という、欲望を増殖する巨大装置（mega machine）から降りる方法は、「(1)システムに流入するエネルギーを減少させて、欲望の自己増殖機構が実質的に働かない状態をつくり出すこと、(2)拘束条件（精神的拘束条件、社会的拘束条件）を変化させて、グローバル化したマネーの流れへ集中しているエネルギーをほかの自由度へ拡散させることである」。これとほぼ同じ内容の「声明」を日本学術会議（2000）がすでに出しているが、その日本学術会議自体が、近代科学の価値中立性に縛られて、そのような「声明」を出したことについて自己批判したことについては、すでに第1論文で紹介した。さらに清水は、次のように述べている。「私にとって意味のあることは認識ではなく、存在である。それは、何を、どのように実践することが、私たち全体の存在にとって善いことなのかを発見することであり、そしてどうすれば、その善いことが私たちにとって嬉しいことになるかを発見することである」。

最後に「環境改善技術の体系化」について付言しておきたい。「環境」を含むすべてが生成・進化するシステムであり、その目指す方向が「精神的な世界」であるとするならば、システムの生成・進化を可能にするための必須条件は、「生成・進化を妨げるような条件を取り除くこと」である。「新しい知」に基づいて、しあわせな生活（well-being life）を送ることのできる社会システムが構築されれば、その過程で環境改善技術は必然的に体系化される。「トップダウン的に体系化された知を与えれば環境改善は進む」という考えは、近代的・二元論的・決定論的な考えであり、「新しい知」への転換を必要とする。

中国が目指している、持続可能な「小康社会」や「和諧社会」は、清水の著書や日本学術会議の「声明」が目指していることと、ほとんど同じである。天与の水に恵まれた交易のまち麗江古城やバリ島の稲作社会〔榎根 2002〕は、「発達のレベル」の初期段階としては、四象限の調和が見事に保たれていた好例である。しかし「すべては生成・進化するシステム」である。麗江古城やバリ島の稲作社会が、進化の過程で「発達のレベル」を一段上げたとき、その段階でも四象限間の調和を保ち得るか否かは、全象限・全レベル的アプローチによって「次なる社会システム」を構築できるか否かにかかっている。

なお、麗江古城とは地域条件を異にする、例えば乾燥地域の環境問題については、別途の研究が必要であることは付言するまでもない。

- (注1) 中国語で「和諧」は調和と協調を、「榮辱觀」は胡錦濤政権が共産党幹部に訓示した、何が誇りであり何が恥辱であるかの価値観を、また「風尚」は気風を意味する。「社会主義榮辱觀の“八個為榮、八個為恥”」の具体的内容は、為榮は「熱愛祖国、服務人民、崇尚科学、辛勤劳働、団結互助、誠実守信、遵紀守法、觀苦奮闘」の8つ、為恥は「危害祖国、背離人民、愚昧無知、好逸悪勞、損人利己、見利忘義、違法乱紀、驕奢淫逸」の8つである。
- (注2) 本稿での引用文の原論文における当該ページについては、後述する第1論文～第6論文参照。
- (注3) 拉市海は、水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関するラムサール条約に登録されている。
- (注4) この解釈の妥当性については榎根(2006)参照のこと。
- (注5) 少数民族の持つ地元の風土風習を改め、支流の文化を漢民族の本流の文化に帰化させる政策で、18世紀前半に少数民族に強制された。
- (注6) 参考1～3の詳細は、榎根ほか(2006b)による「雲南省調査記録」参照。
- (注7) 三眼井や水路などの麗江古城の写真については第5論文参照。

引用文献

- 愛知大学国際中国学研究センターほか 2005 「構築当代中国環境論」 「2005年度 COE-ICCS 国際シンポジウム“中国学”方法論の構築をめざして」 257-375.
- 愛知大学国際中国学研究センター編 2005 「中国における環境問題の現状」 21世紀 COE プログラム人口生態環境問題研究会 2004年度中間報告書.
- 愛知大学国際中国学研究センター編 2006 「中国が進める循環経済と環境政策」 21世紀 COE プログラム人口生態環境問題研究会 2005年度中間報告書.
- ウィルバー, K.・岡野守也訳 2002 「万物の理論——ビジネス・政治・科学からスピリチュアルまで」 トランスビュー.
- ウォーラーズテイン, I.・山下範久訳 2001 「新しい学——21世紀の脱=社会科学」 藤原書店.
- 榎根勇 2002 「水と女神の風土」 古今書院.
- 榎根勇 2005 「中国山西省フィールドワーク記録」 愛知大学国際中国学研究センター編 21世紀 COE プログラム人口生態環境問題研究会 2004年度中間報告書「中国における環境問題の現状」 295-313.
- 榎根勇 2006 「現代中国環境基礎論」 愛知大学国際中国学研究センター編.
- 榎根勇・宮沢哲男・朱安新 2006a 「麗江古城の水と社会」 水利科学 No.291, 41-72.
- 榎根勇ほか 2006b 「雲南省調査記録」 愛知大学国際中国学研究センター編「中国が進める循環経済と環境政策」 211-251.
- 朱安新 2006 「麗江古城地区の水環境に関する社会学的考察——地域社会が抜けつつある世界文化遺産の麗江古城」 愛知大学国際中国学研究センター編「中国が進める循環経済と環境政策」 253-262.
- 清水博 2003 「場の思想」 東京大学出版会.
- 字坊 RED・王超鷹 2005 「殉情物語——トンパ文字に秘められた愛の物語」 技術評論社.
- 徐霽 撮影 編著 2001 「雲南図典」 雲南人民出版社.
- 高見邦雄 2003 「ぼくらの村にアンズが実った——中国・植林プロジェクトの10年」 日本経済新聞社.
- 中国国家地理 2006 「風水專輯——風水 中国人内心深处的秘密」 第543期, 2006年1月号.
- 中田力 2001 「脳の方程式 いち・たす・いち」 紀伊国屋書店.
- 中田力 2002 「脳の方程式+α ふらす・あるふぁ」 紀伊国屋書店.
- 中田力 2006 「脳のなかの水分子 意識が創られるとき」 紀伊国屋書店.
- 西澤潤一・上野勲黄 2000 「人類は80年で滅亡する——『CO₂地獄』からの脱出」 東洋経済新報社.
- 日本学術会議 2000 「『人間としての自覚』に基づく『教育』と『環境』両問題の統合的解決を目指して——新しい価値観に支えられた明るい未来の基盤形成」 学術の動向, 第5巻第7号, 21-31.
- 林維東編 2003 「ナシ紙書」 世界文化遺産麗江古城保護管理委員会企画、雲南美術出版社発行.
- 樊炎冰編著 2005 「中国麗江古城」 中国建筑工業出版社.
- 茂木健一郎 2004 「脳と仮想」 新潮社.
- 養老孟司 2005 朝日新聞 05年6月7日、愛知万博フォーラム「環境本位型社会を目指して——21世紀の科学のあり方」.

-
- ラズロ, E.・野中浩一訳 1999 「創造する真空^{コスモス}——最先端物理学が明らかにする〈第五の場〉」 日本教文社.
- ラズロ, E.・吉田三知世訳 2005 「叡智の海・宇宙——物質・生命・意識の統合理論をもとめて」 日本教文社.
- 李汝明総纂 2001 「麗江納西族自治州志」 麗江納西族自治州志編纂委員会.
- 渡辺欣雄 2005 「『術』(手段)としての宗教——中国民俗宗教システム理解のために」中国南開大学歴史学院・日本愛知大学国際中国学研究中心編、「現代中国学方法論及びその文化視角」国際学術討論会「会議論文集」 4-6.
- Laszlo, E. 2004 “Science and the Akashic Field: An Integral Theory of Everything” Inner Traditions.